
座頭銃【Zato-Gun】

音間マホリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

座頭銃【Z a t o - G u n】

【Nコード】

N 9 2 0 6 N

【作者名】

音間マホリ

【あらすじ】

近未来、壊滅的な最終戦争の後。生き残ったのはわずかな人類と、核や細菌兵器によって生まれた突然変異の化け物達。化け物達は人間を食糧としてしか考えていない。その化け物を倒す、盲目で凄腕の賞金稼ぎ、威吹鬼。その威吹鬼は、呪われた出生の秘密と、化け物との深い因縁を持っていた。

胸にどす黒い復讐心を抱きながら、化け物を狩り続ける威吹鬼。ある日威吹鬼は貴族の夫人から、化け物に命を狙われている息子のボディーガードを依頼される。

瞳目の賞金稼ぎ

おそらくは、遠い未来の世界。

遠い遠い、未来の世界の話。

はたまた、まったくの異世界の話、なのか？

どちらなのかはよくわからない。

異世界というのは、あんた達にとっての異世界、という意味だよ。どちらにしても、あんた達が今息をしている世界……そう、あんた達は現代と呼んでいるようだがね。

そこからは、想像もつかない途方もない遠い世界の話だよ。

もちろん、私らにとってこの世界は現代と呼べるものさ。

ちよいと昔に戦争があつたそうだ。恐ろしい、壊滅的な戦争だ。

なに、戦争の理由なんて簡単さ。

国土の取り合い。資源の取り合い。財産の取り合い。金もうけ。

よくは知らないが、おそらくはそんなとこだ。

国は変われど、世界は変われど、時代は変われど、そいつだけは変わらない。

あんた達の世界でも、戦争が起きる理由なんてまあそんなとこだろっ？

ただ、手段に問題があつた。

核兵器。細菌兵器。どつこの国もこぞつて、こういった武器をばんばん使つたんだ。

おかげで今じゃぺんぺん草一本生えない、文字通り不毛の砂漠や荒れ地になつちまつた所も多い。

放射能や菌が、じくじくと地面の底の底まで染み込んだ。だ。

そんな土地には、まともな人間はただの一人も寄りつかない。

まともな人間は、の話だけれどね。

そんな場所に寄りつくもの。居座るもの。

それは、まっとうな生き物であることをとうの昔にやめてしまった化け物達さ。

こいつらがまったくもって恐ろしい。

核。細菌。放射能。

そんな目に見えないいやらしいやつらが生き物にどんな影響をもたらしたのかは、私にはよくわからない。

でも核や細菌や放射能というやつらはね、地面だけじゃなくて動物や人間にもじくじく染み込んだのさ。じくじく、じくじくとね。

核や細菌や放射能がじくじく骨肉にまで染み込んだ生き物はね、例外なく畸形化していったんだ。畸形化し、凶暴化した。

かつて人間だった者は、理性を失くした。

あるものは単体で、また徒党を組んで、まっとうな生き物を襲い、喰らいはじめた。

もちろん人間もさ。人間の言葉は理解できても、人間の言葉は話せても、やつらには人間の心つてもんがなかったからね。

そいつらは砂漠や荒れ地といった辺境地帯だけじゃなく、町にも現れた。

あるものは人間の目から隠れて。あるものは人間のふりをして。

そして突然現れては暴れ回り、人間を殺した。喰らった。生き血を啜った。

女をさらい、仔を生ませた。

生まれた仔はまた、化け物の血をひくものだった。

辺境地帯、街中問わず、昼夜問わず、化け物が跳梁跋扈する世界。
これが私たちの住む現代社会さ。

どうだね、あんたらの住む現代社会とはだいぶ違うだろう？

人々はそんな化け物を恐れ、脅えながら暮らしていたんだ。

ただこんな世界にもね、政府というものはある。

大陸のほぼ中心に位置する小国 神霧 のえらい人達は、この化け物による不条理な害悪を重くとらえた。

そして民間で組織された 妖怪撃退同業者組合・ギルド に化け物の討伐を依頼したんだ。

ギルドってのは国中にいくつもあり、腕利きの賞金稼ぎを複数人抱え持っている。

そして政府から依頼された化け物退治の案件によって、適した賞金稼ぎを派遣するんだ。

ご推測の通り、化け物の強さにはレベルがあつて、そのレベルによってももちろんギルドから出る賞金の額も違う。

一匹ぶつ殺すことができれば、まともに工場なんかで働いてたらまあ、三ヶ月はかかるくらいの金が一発で出ることあれば、一年はかかるくらいの金が一発で出ることもある。

強い者が勝ち、っていう、実にわかりやすい仕事だな。

もちろん裏を返せば、過酷極まりない任務、っていうことだ。

大した実力もないのに賞金稼ぎに名乗りを上げて、たったの一週間で、包丁で叩かれた挽き肉みたいにはらばらにされた奴だって、まっこと少くない。

強い者が勝つ。強い人間だけが生き残れる。

強い賞金稼ぎならば、たらふくメシを食べる。

わかるかい？ これが私らの世界だ。

あんたらの住む世界とはだいぶ違うだろう。

いや、強い者だけが生き残れる、たらふくメシを食べるということで言えば、あんたらの世界と同じなのかもしれないね。

まあとにかく、そんな遠い未来の世界か、はたまた異世界の話だ。長くなるが、どうか最後までついてきておくんないよ。

それでは、はじまり、はじまり。

生誕のかがり火

真夜中。人里離れた山奥の洞窟。雷鳴が轟く、ある嵐の夜。

「まだか」

「まだか」

「まだ生まれぬか」

手に手に、かがり火を持っている。

かがり火に持っているのは、化け物達。一つ目。三つ目。八つ目。全身が甲殻類のような甲羅に包まれたもの。口がなく、細長い腕と足が四本ずつあるもの。猿のように、真っ黒の毛に覆われたもの。大蛇の体に人間の顔がついたもの。巨大な人間の顔に、昆虫のような脚が何十本も生えているもの。もはや昆虫に近く、人間の形からかけ離れたもの。様々な化け物達が集まっている。

様々な化け物達が集まる、それは熱帯夜に見る悪夢のように醜い夜会。禁断のサバト。

異形の化け物達が口々に喚く。喚く化け物達に取り囲まれているのは、人間の女。

その女は、孕んでいた。

「まだか」

「まだなのか」

「陀羅鬼^{だいらき}よ。お前の仔はまだ生まれぬか」

陀羅鬼と呼ばれたものは、目を閉じたまま応えた。

「……まだだ。もう少し。もう少しだ」

苦悶の声とともに、孕んだ女は体をくねらせる。女は全身汗にまみれている。今、まさに化け物の仔が生まれようとしていた。

「ああ。ああ。ああああああ」

女が絶叫した。

……おぎゃあ。おぎゃあああ。

赤仔は生まれた。大量の血と羊水が混じり合い、ばしゃ、と音を立てて女の股から流れ出た。

「おお！ 生まれたか」

「生まれたのか？ 陀羅鬼」

陀羅鬼は頷いた。

「……ああ。生まれた……ようだ」

「そうか。やっと生まれたか」

「これでまた一人、我々の仲間が増えたということか」

「しかも、我々の長である陀羅鬼。その仔なら、さぞ強い仲間となるに違いない」

「陀羅鬼。その仔とともに人間を喰らおう。生き血を啜ろう」

「さあ、見せてくれ」

「陀羅鬼。そこをどいて皆にお前の仔を見せてくれ」

「……………」

「どうした陀羅鬼」

「見たい。早くみせてくれ」

「見せる」

「……………」

陀羅鬼は、妻である女のかたわらを離れた。生まれたばかりの赤仔を見た化け物達からは、驚きの声が上がった。

「……………」

「……………」

八つ目が、すべての目を剥いて陀羅鬼に詰め寄った。

「どういうことだ。これは……これでは、まるで人間の子供だ！」

「そうだ。陀羅鬼、お前の黒い肌、二本の角、銀の髪、何一つ受け継いでいないではないか！」

「陀羅鬼、我々の長である陀羅鬼。強い陀羅鬼。お前の息子とは思えぬ」

「おぞましい。黒い髪。白い肌。人間だ。生んだ人間の女の因子が強すぎたのだ！」

そんな化け物達のやりとりを、出産に力を使い果たした女は体を起こすこともできずに、汗にまみれてただぼんやりと見ていた。

「殺せ、陀羅鬼」

猿人が言った。

「そうだ。殺せ、陀羅鬼。そんな得体の知れんものは我らの長にはなれん。そのまま殺してしまえい」

「……………」

「どうした。そんな人間もどきでも我が息子は殺せんか」

「そもそもなぜその仔は立ち上がらん。なぜいつまでも寝たきりで泣いているのだ。我々の一族の赤仔ならばすぐに言葉を喋るはずだ。立ち上がるはずだ。その様子では人間の赤子そのものではないか」

「目。そうだ目だ！」

ぎらぎらと赤く光る海老そつくりのやつが言った。

「その仔は目も開かん。陀羅鬼、お前の息子ならば、お前と同じ金色の目をしているはずだ」

「そうだ。陀羅鬼、目を開かせろ」

「目だあ」

「……………」

陀羅鬼は赤仔を両手で抱き上げ、化け物達の方に向けた。泣き叫んでいた赤仔は、ゆっくりと目を開いた。

墨色の雲間から、ほんのわずかに満月が覗いた。

狩る者

それから数十年。時は滔々と流れた。

時が流れても、神霧の人々の暮らしぶりはわずかに良くなっただけで、さほどの変化もなかった。あい変わらず化け物達は野に、辺境に、そして町に現れ、人間を殺した。喰らった。生き血を啜っていた。

その日、町の外れには大雨が降っていた。二メートル先もうすぼんやりと見えづらいほどの土砂降りの雨だ。町の外れだったので人家は少なかったが、真っ昼間だというのに雨のせいで誰もが家に閉じこもっている。

その土砂降りの雨に打たれ放題になっているのは、たった二人の人影だ。

二人……いや、厳密には二人、ではない。

一人と一匹。

一方は人間だ。マントに付いたフードを目深に被っている。

そしてもう一方は、化け物だ。

腹と背中に亀のような甲羅がある。雨のせいではなく、全身がぬらぬらと緑色の粘液で濡れている。手足の指の間には水かきがある。鋭く尖ったくちばしが開いた。腐った海藻を口いっぱいに頬張ったまま喋っているような、不快極まりない聞き取りづらい声だ。

「……話はわかった。で、人間よ。人間の小僧よ。お前は俺にどうして欲しいんだ？」

「……どこか遠い山の中へ行け。そして二度と町に降りて来るな。金輪際、二度とだ。それがいやなら」

「それがいやなら、どうすんだ？」

「死んでくれ」

化け物は首を傾げた。

「……何だと？」

「この薄汚いドブ河におとなしく住んでいただけなら見逃してもらえただろうよ。だがてめえ、人を喰ったろ」

「ああ。もちろん喰ったさ」

「四度目だな」

「さあなあ、覚えてねえな。一つ聞きたいんだがな、お前ら人間は生まれてこのかた、牛や豚を殺して喰った数をいちいち覚えてるか？ 覚えてちやいねえだろ？」

「覚えてちやいねえな。……だがそれをお上がな、許さねえとさ」

人間は、ゆつくりと腰の銃に手をかけた。

「馬鹿が。人間の小僧。いや」

化け物の首がずるり、と伸びた。

「俺達の命で飯を喰う、馬鹿な賞金稼ぎ。お前に俺が殺せるか？

いいことを教えてやろう。俺が喰った人間はな、お前のような賞金稼ぎばかりだ。お前らの言葉で言うとな、正当防衛ってやつだ」

化け物はくちばしを歪めていやらしく嗤った。次の瞬間、化け物の首は人間に向かって一気に数メートル伸びた。

「——！」

紙一重で人間は化け物の首をかわした。人間が立っていた場所のすぐ後ろにあつた岩塊に化け物の鋭いくちばしが突き刺さり、岩塊は爆裂するように粉々になった。

「む」

化け物は目をみはった。

今の一瞬で、人間は8メートルも横に飛びのいていた。

人間が身に着けていたフード付のマントは、爆裂した岩塊の飛沫を受けて千切れ飛んでいた。すでに人間は銃を構え、化け物に狙いを定めている。

拳銃……と呼ぶのが正しいのかどうか定かではないが、その長さ、握りこぶしからひじほどまではあろうかという、巨大な拳銃だ。

「——？ 人間、お前……」

化け物がいぶかしげに顔を歪めた。首がずるずると縮み、元の長さに戻った。

「目が見えねえのか？」

人間は、きつぱりと目を閉じていた。

「お前、目が見えねえくせに、今の俺の攻撃を避けたのか？」

「……だつたら何だ？ 俺が目を閉じていたら、てめえは俺を殺せるか？」

化け物は舌なめずりをした。

「……小僧が、なめやがつて。まったく近頃は賞金稼ぎにもろくな奴がいねえ。それにそのでかい拳銃。なあ人間の小僧、そのエモノはどう考えてもお前の身体には不相応だぜ、ちよつとばかりでかすぎる。大体拳銃なんかじゃ俺の甲羅は絶対に撃ち抜けねえ。しかも目も見えねえお前が、」

人間の構えた銃が轟音を放った。

「べらべらとよく喋る化け物だ」

「……………」

化け物には何が起こったのか、瞬時には理解できなかったようだ。まずは人間が、少年のようにも見える小柄な人間が短機関銃ほどの大きさもある巨大な拳銃を片手で撃ったこと、それから目を閉じたまま数メートル離れた自分にその弾丸を命中させたこと。そして放たれた弾丸が、頑丈なはずの自分の甲羅を胸から背中まで貫通し、握りこぶしがすっぽりと入ってしまうほどの見事な穴を開けたことを、順序だててゆっくりと認識していった。

「がは」

化け物は大量に血を吐き、両膝をついた。

人間は大腿で歩き、化け物に近づいた。手には刃渡り四十センチほどのナイフが握られている。

「悪いな。証拠を持って帰らねえと、金が出ないもんでよ」

人間は、化け物のべとべとしたまばらな毛髪を掴んだ。

「……お前は……何もんだ……」

ナイフを首に振り下ろした。ごつり、と骨を断つ音がして首は鮮やかに切断された。

「ただの賞金稼ぎだ」

人間はぼつりと呟いた。

雨は先ほどより、激しさを増している。ざあっざあつと間欠的に地面を打つ雨音によって、人間の呟きはかき消された。

威吹鬼

「まったくこんな日にあそこら辺りに行くってことを考えるだけで気が滅入っちゃう」

と声に出して言いたくなるほど、本当に気が滅入っちゃう。とはいえ、行かないわけにもいかん。そう思い、八柱は賞金やばしの入った茶封筒を持って事務所を出た。

暑い日だ。歩いているだけで、一秒ごとに身体の水分を持っていられる。霧でもかかっていそうなほど湿度は高いのに、のどはすぐにかからになる。しかし八柱のギルドは貧乏この上ないので社用の電気自動車など持つてはいないし、たったの五台しかない自動自転車も出払っていて、まあつまりはこんな暑い日だろうが賞金稼ぎに金を渡しに行くには歩くしかない、という話だ。

八柱が「あそこら辺り」と呼ぶのは、神霧のほぼ中心地・神都の東の外れにある名もない下町のことだ。市場と長屋と一杯飲み屋と工場しかないゴミゴミした小さい町。八柱は、どうもこういった汚い町が好きになれない。

環状電鉄をぬめらぎ駅で降りると、駅舎の出口がすぐに市場の入り口になっている。四つあるどの出口から出ても、目の前は市場だ。ぬめらぎ駅では、市場を通らないとどこにも行けない。

透明のポリカーボネイト製防御シールドで覆われた改札を出た途端に焼いた肉、得体の知れない様々な料理、程度の低い合成アルコール、そしてあらゆる生き物の脂の臭いが鼻をつく。こういった色々なものの臭いがもう好きになれない。八柱は眉をしかめながら商店街を歩いた。アスファルトの道は脂でぬるりと滑る。

通路が狭い。天井が高い。蛍光灯が暗い。魚屋の店先では、手足の付いた魚が腐臭を放っている。肉屋の入り口には見たこともない六本足の獣が毛をむしられて吊るされている。がりがりに痩せた裸

足の少年が道端で座り込み、阿片パイプを吸っている。八柱に向けられた目はどろりと黄色く濁っている。八柱はあわてて目を逸らした。蒸し暑さもピークだ。臭さと暑さで胸がむかむかしてくる。

三百メートルも歩けば、やっとアーケードが途切れる。饅えたような臭いから開放されてほっとしたもの、ねつとりと湿度を含んだ風はすぐに次の臭い、今度は機械油の臭いを運んでくる。いつものことである。また八柱の気持ちは底の方でげんなりした。太陽は相変わらず凶暴な熱波を容赦なくぶつけてくる。八柱は汗を拭き拭き、重い足取りでさらに東に歩いた。

実に幸運なことに、八柱の目当ての人物は工場の外にいた。トラックの荷台から、クズ鉄が満載されたドラム缶をひよいひよいと降ろしていた（後でわかったことだが、そのドラム缶の重さといったら！ ひよろりと痩せていて非力な八柱ではあるが、彼が全体重を載せて押してみても、そのドラム缶は微動だにしなかった）。

「景気のほどは？」

二十メートルほど離れた所から、八柱は威吹鬼いぶきに声をかけた。威吹鬼は八柱を無視して黙々と作業を続けている。八柱はゆっくりと二十メートル歩き、威吹鬼が作業しているトラックのすぐそばに立った。

「いい答えは考えられたら？ 景気のほどは？ 威吹鬼」

威吹鬼はトラックの荷台に飛び乗り、最後のドラム缶を抱え、そのままの姿勢で軽やかに荷台から飛び降りた。

「五十メートルほど先から」

ドラム缶を工場の壁面にきれいに並べると、作業用の革手袋を外しながら威吹鬼はこちらを振り返らずに言った。

「五十メートルほど先から考えてたさ。知ってるか、八柱さん。あんたの足音は独特なんだ。五十メートルほど先からあんたの足音は聞こえていた。あんたの大好きな質問『景気のほど』について、あんなに五十メートルほど先を歩いていた時から考えてたさ」

八柱はくっくつと笑いながら訊ねた。

「なるほど。それならなおさらだ。いい答えは考えられたら？
で、どうだい景気は？」

威吹鬼は振り向いた。

その目は、いつも通りしっかりと閉じられている。

「景気は最悪だ。答えとしては最高かい？」

八柱は声を出して笑った。

「最悪だ」

威吹鬼は少しだけ微笑んだ。

「威吹鬼。こないだの河童のね」

「河童？」

「便宜上、そう呼んでんだ。その、河童のね」

言いかけて八柱は店の奥を覗き込んだ。

「ここで話してもいいのかい？」

威吹鬼は頷く。

「かまわねえよ。副業が禁止されているわけでもないし」

「しかし、賞金稼ぎとあっちゃあね……」

「従業員はみんな、うすうす気付いちやいるよ。あまり触れられねえけどな」

「そうか」

「で、河童がどうしたって？」

八柱は目的を思い出し、鞆から茶封筒を引っ張り出した。

「河童のね、認可金額が下りたんだ」

八柱は威吹鬼の目の前で茶封筒を振って見せた。威吹鬼は八柱の手から茶封筒を、ちよっと丁寧な仕草で受け取った。

「いくらだ」

「自分の目であらためてくれ」

と言つてすぐに、

「私が数えようか？」

と付け加えた。

威吹鬼は唇の端を歪めて笑った。

「必要ねえ。知ってるだろ」

威吹鬼は茶封筒から札束を引っ張り出し、親指の腹の部分でぱりとし瞬で数えた。まるで熟練した手品師がカードを操るように。そして眉をしかめた。

「おい。四十万か？」

「見えていないのによくわかるね」

「はぐらかすなよ。四十はねえだろ」

八柱は肩をすくめた。

「それが各ギルドで出した平均額だ」

「あいつは人を何人も喰ってる」

「喰われた人間は五人中、四人がハンターだ」

「民間人なら賞金が高くなるってのか？ ハンターだっておんなじ人間だぜ」

吐き捨てるように威吹鬼が言った。威吹鬼は賞金の額でこねることとは滅多にないが、ごくたまにこういった類のことを言う。八柱はあえて大いに困った顔をした。目を閉じているが、威吹鬼にはこうした人の表情の変化が雰囲気でわかるのだ。威吹鬼はため息をついた。

「まあ、しょうがねえか。あんたに言っても」

八柱はもう一度肩をすくめた。

「すまないね。私はただのコーディネーターなんだ」

「そうだな」

威吹鬼は自嘲的に笑った。そして、ややあつて視線を八柱に向けた。いや、目を閉じているのだが、顔を上に上げ、確かに視線を八柱の目に据えた。

「喰われた人間は、五人だって？」

八柱はやや間を開け、

「そうだ」

と言った。

「四人って聞いてた」

「調べて、後でわかったんだよ。奴は、河童はハンター以外にも一人喰っていた」

何か大きな制御弁を開けたらしく、熱された鉄釜から大量に蒸気がもれる音が聞こえた。工場の中では従業員達の大きなしゃがれ声が飛び交っている。

「仕事に戻らないと」

威吹鬼が工場を覗き込んだ。今度は八柱がため息をついた。

「まったく、こんな汚い工場で働く必要なんてないだろう？ あんたくらいの腕と稼ぎがあるならさ。何年かみっちりハンターやって金貯めて、ちっちゃくても家建てりゃあさ。仕事なんぞ他になんぼでもあるだろうに。なんでこんなところで働くことにこだわっているんだい？」

威吹鬼は沈黙した。

「まあ、あんたみたいな凄腕に隠居されたら、私らしちゃあ困るがね」

威吹鬼は少しだけ何かを考え、

「ハンターはあくまで副業だ」

と言った。

「工場はバイトだろ」

「それを言うならハンターだって派遣の仕事だ。定職じゃねえ」

「それでもこちらとしてはぜひ依頼したいんだ。威吹鬼、あんたの腕を見込んで」

八柱はやや真面目な声で、さっきと同じことを囁んで含めるようにもう一度言った。

「河童は、ハンター以外にも一人、喰っていた。赤ん坊をだ」

工場からは、がーんがーんという鉄を打つ音がとてつもない音量で響く。酸化した鉄とオイルの臭いが強烈に漂う。頭の割れそうなその大音量と臭いと相変わらずの暑さで、八柱の意識は朦朧としてきた。

まったく、だからここへ来るのは嫌だったんだ。今にも反吐がこ

み上げてきそうだ。
八柱は渋い顔をした。

月読みの子

五時半で威吹鬼は工場の仕事を終え、その日の六時にはきつちりと妖撃舎ようげきしゃ、つまり八柱に月給十八万を払っているギルドの応接室にいた。

「あんたが仕事終わったらすぐ来いなんて言うから、ほんとにすぐ来たぜ」

と威吹鬼は言った。タオルを首から下げている。着ている半袖シャツの首元と脇には汗の染みが大きく広がっている。

「わりいな。風呂に入っている暇もなかった」

「いいさ。急に呼んだのは私さ」

普段は賞金稼ぎを応接室などに上げることなどまずない。せいぜい窓口止まりだ。特別な仕事だったとしても、事務机の横っちょで打ち合わせをする。

威吹鬼の場合は特別だ。威吹鬼の場合、少しばかり話が違ふ。

常に目を閉じているが、だから動きが鈍いかと問われればさにあらず。それで化け物と命を奪い合うハンター稼業が務まるはずもない。

威吹鬼は聴覚・味覚・嗅覚・触覚といった視覚以外の感覚が異常に鋭い。つまり音や匂い、ほんのわずかな空気の流れで対象の位置、大きさ、重さ、質感などといったところから筋力、スピードもほぼ正確に捉えることができる。つまるところ、五十メートル先から歩いてくる八柱の「景気のほどは？」という質問に対する答えを、肉体労働をしながらじつくりと考えることができるのだ。

射撃の腕は百発百中。目が使えるハンターですら、まったく相手にならない。目を閉じたまま威吹鬼の放った弾丸は、大抵は敵の急所と思しき辺りを貫通する。

さらに精密で俊敏な動き。威吹鬼は飛んでくる矢を手でつかみ取れる。

そして豪快な力。これに関してもおよそ人間離れしているが、八柱が全体重をかけても一ミリたりとも動かせなかったクス鉄満載のドラム缶を軽く運んでいたというだけで、もう説明の必要もない。

こういったもろもろの要素を列挙するだけで、威吹鬼が賞金支払い所の窓口や事務機の横つちよではなく、応接室で打ち合わせをする立場にあるということは理解に易しい。

しかし、威吹鬼はそれだけではない。威吹鬼が持っているのは、強さだけではない。

威吹鬼には他のハンターとは異なる点がある。決定的に。

「威吹鬼。あんたが殺った河童の話だ。その、どれくらいの大きさがあつたね？」

「大きさ？」

威吹鬼は出されていた茶を一口すすり、口を湿らせた。

「俺がぶつた切つて持つてきた頭を見たろ？」

「ああ、もちろん見たさ。でかかったな。収穫の季節が過ぎて、ちよつとばかり育ちすぎた西瓜くらいあつた」

「それなら、大体分かるだろ？ そうだな……二メートル半くらいか。調べもついてんだろ？」

「ああ、ついている。ついているとも」

「どうしてそんな質問をする」

八柱はほんの少し沈黙した。そしてゆっくりと口を開いた。

「威吹鬼。奴の討伐に、ウチを含めた様々なギルドが差し向けた四人のハンター達。つまり、奴の胃袋に落ち着いたハンター達だな。

決して無能な四人ではなかった。いずれも腕利きだ。まあ、あんたほどじゃないがね」

「ふうん」

「一人は 蛇忽会^{だじつかい} の蓮蚊^{れんか}という男だ。知っているだろう？」

「ああ知ってる。地下闘技の覇者だ。挑戦者を四十人片っぱしから殴り殺したっていう、無敗のチャンピオンだろ」

「そう、そいつだ。その蓮蚊だよ。そいつを含めた四人が、ぺろっ

と平らげられた。成すすべもなく」

「……………」

「あんたの言った通り、二メートルを超える化け物だ。大物だよ。事を重くとらえた各ギルドは連絡を取り合い、威吹鬼、あんたをあ
の河童に差し向けることにした」

「で、一件落着」

「……とはいかなかった」

八柱も茶を一口すすり、ひりひりするのを潤した。昼間、ぬめ
らぎ駅周辺を歩いた時からどうものどの調子が悪い。まったくあの
周辺の空気は汚すぎる。だから行きなくなかったんだ、とまた八柱
は思った。

「あとで調べて分かったんだが……つまりあんたが河童の首をはね
たあと、でね。獰猛な河童の大物にぞくぞくと出てこられてもたま
らないのでね、ウチ専属の化学班と特捜班に、色んな方向から調べ
させたんだよ、河童のことを。……するとね、妙なことが分かった。
今から三週間ほど前……つまり威吹鬼、あんたがあ河童を殺る二
週間前。あいつの身長はわずか一メートル半、体重にいたってはた
ったの四十キロしかなかった。四十キロというと、あんたが昼間運
んでいたドラム缶の何分の一だね？」

威吹鬼は、持ったままだった湯呑みをゆっくりとテーブルに置い
た。

「七分の一だ」

「そうか、あのドラム缶は三百キロ近くあったのか……！ 恐ろし
い腕力だな」

「あの河童も、多分そんなくらいの重さはあったぜ」

「そうだろうね」

八柱も湯呑みをテーブルに置いた。

「あつただろうね。だから妙な話なんだ。わずかな日数で、体重を
七倍にした河童。一体何を喰えばそんなに膨れ上がるんだ？」

「月読みの子だ」

威吹鬼は間髪入れずに答えた。

「……つくよみ？」

「あの四人のハンター以外にもう一人喰った人間。河童の野郎は恐らく、一番最初に月読みの子を喰って力をつけたんだろっ」

八柱は置いたばかりの湯呑みを手にし、もう一度のどを潤した。

八柱ののどの調子は戻らない。

「わかるように説明してくれないかね」

目を閉じたまま威吹鬼は顔を四十度ほど上げ、腕組みしてソファに深く座り直した。いつも威吹鬼が話し出す時の、お約束の姿勢だ。

「化け物の間では定説になってる話だ。十月の満月の夜は、奴らにとって特別な夜だ。奴らは月読みと呼んでる。そう呼ぶ理由はわからねえが。その月読みに生まれた人間は、化け物どもにとって垂涎のご馳走なんだよ」

「……と、言うത്？」

「その月読みに生まれた人間を喰えば、馬力が出る。もっと言えば、霊的なパワーが上がる。めっぼう強くなれるんだ」

威吹鬼は組んでいた腕を解いた。

「月読みの人間は、若ければ若いほどいい。赤ん坊に近いほどな。多分河童は月読みの赤ん坊の存在をどこから嗅ぎつけ、喰ったんだろっ」

八柱はごくりと唾を飲んだ。

「それで合点がいった」

「……これから依頼の話かい、八柱さん？」

八柱は身を乗り出した。

「ああ。そうだ」

なぜか小声になった。

「お金持ちのご息サマが化け物に狙われているんだよ」

「……つまりその子は」

「その、月読みの子だ」

本題に入る前に、すでに八柱ののどはひび割れていた。湯呑みに茶はもう残っていない。湯呑みを逆さにし、残りをすするようにして何とか飲んだ。しかし苦い茶のほんの一しずくでは、これ以上八柱ののどのひりつきを抑えることはできないようだ。

座頭の銃

八柱の話を聞いた翌日の昼過ぎには、威吹鬼は依頼主の屋敷の門前にバイクを止め、呆氣に取られていた。

（でかい家だな）

確かに大きい。そこら中にあふれている長屋とは、まず建っている場所からして違う。郊外の高台だ。あらゆるものが密集している下町とは違い、隣の屋敷との間隔がまるつきり広い。ぽつりぽつりと、余裕を持たせて品良く建てられている。敷地面積にしても、「うちのお屋敷はこの辺りでも小さくて、本当に恥ずかしいんですよ」と、大きな宝石のついた指輪をぎらつかせながらお上品なご夫人がのたまおうと、下町長屋だったら五棟はすっぽりと入ってしまうだろう。

しかし依頼主の屋敷は、長屋が十棟すっぽり入ってしまうほど大きかった。異国風の建物だ。部屋数など、いくつあるか見当もつかない。大きな宝石をぎらつかせたご夫人が「本当に恥ずかしいんですのよ」と言うのも頷ける。

（八柱さんは貴族の家柄だ、とか言ってたっけ）

胸の内で威吹鬼は呟き、門をくぐる。すると正面玄関の巨大なドアがあり、これもまた冗談のように巨大な鉄製のドアノッカーがついていた。

威吹鬼はそれを手にし、ドアを二度ノックした。ごん、ごん、という威吹鬼が想像していたよりもはるかに大きな音が木製のドア全体に響いた。

（これくらいでかい音なら、この屋敷のどこにいても聞こえるんだろうか？）

威吹鬼は返答を少し待ち、もう一度ごん、ごん、とノックした。そしていつもの癖で、素早く全身を撫で回し、装備を確かめた――。

「まったく荒っぽく使ってくれやがる」

唇をいびつに歪め、皮肉混じりに蟹は言った。

「だから武器商人としてはリペア代だけでも儲かってしょうがねえ、だろ」

威吹鬼はにやりと笑いながら言った。

「その通り。商売繁盛で言うことねえ」

蟹は、その名の通り蟹の甲羅そっくりの顔を赤くして笑った。

平たく言えば、賞金稼ぎに武器を売る武器商人。妖撃舎のある神都のすぐそば、油霞町の裏通りの地下に小さな店を開いている。がめつく、下世話な性格だ。

ただ、腕のいい鉄砲鍛冶であることは確かで、威吹鬼の武器はすべて蟹の手作りだ。妖撃舎のお抱えハンター達も、多くは蟹が作った武器を使っている。

「コングは少しだけ改良しておいた」

蟹は分厚い木製の作業台の上に、例の巨大な拳銃を置いた。

「へえ。どんなふうに？」

「銃身の先っちょのとこだ。ガス抜き用の穴をいくつか開けた。ほら、ここだ。フロントサイトの横だ。連射しても反動と銃身の跳ね上がりが抑えられるし、銃身が熱を持ち過ぎることもない」

「なるほどな」

「それからな、試しにこの弾丸を使ってみろ」

蟹はコングの横に大きな弾丸を一つ立てて置いた。

「十四ミリアーマーピアシング弾だ。弾芯が特殊鋼でできてる。タングステンガーバイトって特殊鋼の弾芯を、銅でコーティングしてあるんだ。今までの四五四カスールよりも一回りでかいだろ」

「貫通力があるってことか」

「そうだ。どんな化け物でも一撃で倒せる抜群の貫通力を持つ」

蟹は唇を歪めて笑った。

「ウラでしか流通してねえ」

「ウラ？ この店に、オモテで流通してる武器がなんぼもあるん

だよ？」

「違うない」

威吹鬼はコングを革製ホルスターから抜き、ぶんぶん振って重さ
と取り回し感確かめてみる。その様を、蟹は呆れ顔で見た。

「装弾数は十発。十発の弾丸込みで、七キロだぞ。ほとんど自動小
銃みたいな重さだ」

「そうなのか？」

「そうだよ。そいつは威吹鬼、あんた専用のハンドガンだ。並の人
間にゃ振り回すことも撃つことも無理だ。一発で腕がぶっ壊れる」

蟹は作業台にボール紙製の箱を一つ載せた。

「アーマーピエシング弾だ。とりあえず百発」

「ああ」

威吹鬼は銃を腰のガンベルトにつけた。

「赤尾は研いでくれたか」

蟹は「おっと」と小さく言って奥の作業場を歩き、大振りのナイ
フを抱えるように持って戻ってきた。

「こいつを忘れるとこだ」

蟹からナイフを受け取り、威吹鬼は鞘からすりりと抜き放った。

そして目の高さに切っ先を持ってきて、軽く振ってみる。

「いいな」

「まったくねえ、こんな無茶なオーダーに応えるのは俺くらいのも
んだぜ。刃渡り四十センチ、幅十センチ、ブレードの厚み二センチ。
三キロはあるな。そりゃああんた方が相手してる化け物ほどタチは
悪くないがね、そのナイフももはや化け物だぜ。そんな細い腕でよ
く振れるもんだね」

「俺は、信頼できる相方を作ってくれてオーダーしたんだ。化け
物をオーダーしたつもりはねえ」

「いいや、俺に言わせりゃ化け物だ。そいつは完全にナイフの化け
物だよ。そんな化け物で、一体何を斬るつもりなんだい？」

「決まってるだろ？ その、化け物の首さ」

「なるほど」

蟹はまたへっへっ、といやらしく笑った。赤い顔が脂でてかりと光っている。威吹鬼は黙ってナイフを鞘に収め、背負った。

「約束の二十だ」

威吹鬼は紙幣の束を作業台に置いた。蟹は眉間にしわを寄せた。

「特殊な弾丸を用意してるんで本当は二十五、と言いたいところだが。まあお得意様だ。二十にしとこう」

「当然だろ。約束の額だ」

「かなわねえな」

蟹は卑屈に笑った。威吹鬼はきびすを返し、地上へ出る階段へ向かった。

「じゃあな。ありがとよ」

「また来てくれよ」

「生きてたらな」

「生きてたら、か。兵隊さん、今度はどこの戦場に出兵しなさるね？」

威吹鬼は階段の途中で足を止め、振り向かずと言った。

「いつもと同じだよ。あの世とこの世の、境界だ」

ほどなくして、大きなドアは内側からゆっくりと開いた。ドアが軋む大きな音に、威吹鬼の回想は断ち切られた。

「……妖撃舎の威吹鬼様ですね。お待ち申し上げておりました」

低い声だった。長身瘦躯の、初老の男だ。白いものの混じった髪をびったりと後ろに撫でつけ、闇夜のような漆黒のスーツを着ている。

「……妖撃舎に……ウチに依頼された方ですか？」

威吹鬼の問いに男は軽く頷き、

「使用人頭の洛らくと申します」

と名乗った。

「私が連絡差し上げました。しかし、依頼主は私ではありません。」

この館のあるじです」

そう言って洛はドアを大きく開け、威吹鬼に入室をうながした。

「ようこそ高羅^{たから}家へ」

威吹鬼は、ぼんやりと薄明るい室内に足を踏み入れた。目を閉じたまま躊躇することなく洛の脇をすりとりすり抜けた威吹鬼を、洛はじろりと目で追った。

あおいと麻貴と、月のはなし

「あおいー。月のうさぎさんのお話をしてえ」

「またですか？ 麻貴^{まき}坊っちゃん」

あおいと呼ばれた少女はカーテンを引いた薄闇の中をゆっくりと歩き、麻貴のベッドに腰掛けた。

「早くお昼寝しないと」

「聞きたいの。月のうさぎさんのお話」

あおいはふつと微笑んだ。

「……だつて坊っちゃん、泣いちゃうんだもん。月のうさぎさんのお話をしたら」

「今日は絶対に泣かないからー」

「うっん、いつも泣いちゃうでしょ？ だから、さ、早くお昼寝しましょ」

「泣かないから。お願い、あおい」

麻貴は掛け布団から出した手をばたばたさせて駄々をこねた。こ
うなるとこの坊っちゃんと言うことを絶対に聞かなくなる。あお
いはそれをよく知っている。ふうつ、とため息をついた。

「むかしむかし……」

急に麻貴の目はきらきらと輝きはじめた。

「あるところに旅人がいました。」

旅人はたった一人で旅をしていました。

旅人は森に入っしてしばらく歩いたところで、道に迷ってしま
いました。

食べ物はいくさん用意していたのですが、
ついにそれもなくってしまいました。

旅人は困りました。とてもおなかがすきました。
でも、おなかがすいても食べ物はありません。

困っている旅人を、いろいろな森の動物たちが見ていました。

『旅人を助けたい』。動物たちは思いました。

木登りが得意なおさるさんは木に登り、くだものを取ってきました。

くまさんはハチミツを取ってきました。

ところが、うさぎはなにも取ってできませんでした。

きつねさんのように動きがはいわけでもなく、

おさるさんのように身が軽いわけでもなく、

くまさんのように力があるわけでもありません。

うさぎさんは、おなかをすかせた旅人のために、なにもできなかったのです。

うさぎさんは困りました。

旅人のためになにかしてあげたい。なにか食べさせてあげたい。

心を決めたうさぎさんは、旅人のおこしていた焚き火の中に飛び込みました。

そして言いました。

『旅人さん。どうかわたしを食べて、元気になってください』

あおいがちらりと横目で麻貴を見ると案の定、ベッドからすっかり身を起こし、ぼろぼろと涙を流しながらしゃくりあげていた。

やっぱりこうなっちゃった。目を泣きはらしていると、奥様が心配するんだけどなあ。あおいは思った。だがこのあとの展開もおおいいには予想がついている。

「ほら泣いちゃった。でも坊っちゃん、大丈夫。まだ続きがあるでしょ?」

麻貴は目を擦りながら、うん、うんと何度も頷いた。

「自分のために死んだうさぎさんを見て、旅人は涙を流しました。

実は旅人は神様だったのです。

うさぎさんの優しい心に感動した神様は、うさぎさんを月に連れ

て行きました。

そして月に神殿を建て、うさぎさんを葬りました。

うさぎさんは、月の神様になったのです。

だから、月にはうさぎさんがいるのです。

満月の夜、うさぎさんはそのかわいい姿を私たちに見せてくれるのです」

「おわり」

あおいは話し終え、麻貴の顔を見た。やはり笑顔に戻っている。

「面白かった？」

「うん。よかったね、うさぎさんは月の神様になったんだよ」

「そうね」

あおいは微笑んだ。

「もうお昼寝できるね？」

「うん」

麻貴は目をつむった。

あおいは心の中で、いち、にい、さんと数えだした。そして十を数える前に、麻貴は軽い寝息を立てだした。いつものことだ。本当はとても眠かったようだ。あおいはそんな麻貴をとて愛おしく思った。

振動を与えないように、あおいがそつとベッドから離れた時に、遠慮がちなノックの音がした。

「あおい」

洛の声だ。

「いいか？」

「はい。坊っちゃんはお休みになりました」

ドアがゆつくりと開けられた。

「話していたお客様が来られた。一階の応接室にいらっしゃる」

「はい」

「お前も会っておけ」

「……はい」

洛は先に立って広い階段を降りる。

「どうだね。坊っちゃんを寝かしつけるだけの仕事には、やりがいを感じるかね？」

あおいは目を伏せた。

「……他にもいろいろと仕事はありますから……」

「ふん」

洛は小声でせせら笑うように言った。

「絵本を読み、散歩をし、話し相手になる、か。あおい、お前が羨ましいよ。そんな成りのお前が、子供とじゃれてるだけでこんな高給をくれる屋敷で働けるとはね。坊っちゃんさえ懐かなければ、お前など」

「……」

あおいは黙るしかなかった。

そんな成りのお前。昔から言われ続けてきたことだ。

「しかし薄気味悪い男だ。目が見えないらしい」

あおいは顔を上げた。

「……目が？」

美也、戦闘

一階の豪華な応接室では、美也と名乗る高羅家の女主人と威吹鬼がソファ―に掛け、話していた。

「威吹鬼さんはあの……目が見えにならないの？」

威吹鬼は軽く頷いた。

「そうなの……」

美也は美しい女だった。年齢は四十を過ぎているように見えるが、身体の線は崩れておらず、肌のきめも細かくて色が白い。身体にぴったりと密着した、黒く丈の長いワンピースを着ていた。香水の匂いがきつい。

「それで、あの、目が不自由でお仕事の方は」

「ご心配なく」

威吹鬼はぴしゃりと言った。

「一応、組合からは S の認定を受けています」

ギルドではハンターのランクを上から S、A、B、C と四段階に分けている。もちろん S は最高ランクで実力がある分、凶悪な化け物の相手をすることも多い。ついぞのような、ハンターばかり何人も喰った河童の相手も S クラスの仕事だ。

「目が開かなければ開かないで、普通の人間が見えないものが割合に見えたりもするんですよ」

威吹鬼が表情を変えずに言った。

「……威吹鬼さん」

「はい」

「あなたは美しいわ」

美也は威吹鬼の流麗な口の動きをじっと見て言った。

「とても美しい」

威吹鬼は答えない。

「私の息子もね、麻貴も、とても美しい子なの。ええ、もう素晴ら

しく美しい子よ。私によく似ているわ」

美也はティーカップから少しだけ紅茶をすすった。

「だから化け物に狙われているのかしら」

「失礼ですが、ご主人は？」

「死んだの」

ノックの音がした。

「奥様」

「入ってちょうだい」

ドアが厳かに開き、洛が一礼して入室した。あおいも続いた。

「彼女には麻貴の世話係をしてもらっているの。私も仕事で家を留守にすることが多いから。ほら、あおい。こちら、妖撃舎の威吹鬼さん」

「……あおいです。こちらのお屋敷でお世話になっています」

あおいはあわててぺこんと頭を下げた。わずかな空気の揺れを感じ、威吹鬼も軽く会釈した。

「あとは料理人が一人とメイドが一人と、掃除婦が二日に一度来るだけ。こんな大きなお屋敷、必要ないのよね」

美也が微笑をたたえて言った。

あおいは慣れない空気にどうしていいかわからず、落ち着かない様子で手を前で組んだまま、なんとなく洛の横に立つたままになっていた。

「大体の話は聞いてらっしゃるわよね？」

威吹鬼は頷いた。

「軽くは」

「揃ったことだし、ちゃんと話すわね。……息子の麻貴は今月、五歳になるわ。数週間前から、屋敷に妙なものが現れはじめたの。夜の庭の隅で真つ黒な影がうずくまっているのを料理人が見たわ。その影は、麻貴の部屋をじつと見ていたらしいの。それで私はあおいを雇ったの。ごつい男のボディーガードなんて、かえってあの子、怯えるから。……他にもあるわ。掃除婦は、六本足の大きなトカゲ

のような生き物が外壁を這っているのを見て悲鳴を上げた」

美也は冷静な口調で淡々と話し続けた。

「もっともそのトカゲのような生き物は、恐ろしく速い動きで逃げたようだけどね。半径五百メートルに響き渡るような掃除婦の絶叫を聞いて。問題は、そのトカゲも麻貴の部屋に向かおうとしていた、ということ」

「化け物は、子供や女性を襲う傾向にあります」

「どうしてかしら？」

威吹鬼は肩をすくめた。

「男より喰うのが楽だから、でしょう」

美也は黙った。そして少し間を空けて、また話し出した。

「……ある時なんて、麻貴が目覚ますと窓が開いていて、部屋の隅の隅に自動自転車ほどもある大きなイナゴがいたんですって。麻貴とあおいが悲鳴を上げることもできずにじっと見ていると、それはゆっくりとした動きでまた窓から姿を消した、って。……私は本当に世間知らずだから……化け物が人間を襲うことは知っていたけれど、それを専門的に退治してくれる機関が民間にあるなんてことも知らなかったのよ。それで洛に相談したら、そちらを紹介されて」

威吹鬼は頷いた。

「今の話で、何か気付いたことがあって？」

「……一種じゃなく、何匹も違う化け物が来ているのがひっかかります。恐らくは様子を見に来ているのでしょうか……」

「様子？」

「そうです」

「何の様子を？」

「もちろん、お子さんを喰う頃合いの様子です」

美也は絶句した。

「……なぜ……。なぜ、麻貴が狙われるの？」

「それは恐らく、お子さんが月読みの子だからでしょう」

「……つくよみ？」

「……そうです。月読み、です」

威吹鬼は紅茶を一口飲んだ。

「お子さんは今月五歳になる、とおっしゃいましたね？」

「そうよ」

「つまり十月生まれ」

「……そう」

「十月の満月の夜に生まれた子を、化け物どもは月読みの子と呼びます。その月読みの子を喰えば化け物は強くなれるんです。……恐らく化け物どもは月読みの子に霊的パワーが最も宿る日、つまり、今月の」

美也はため息をついた。

「麻貴の誕生日ね」

「その周辺を狙ってくるつもりでしょう」

威吹鬼は腕を組んだ。

「しかし言ったように、一種じゃなく、何匹も違う化け物が来ているところが妙だ。普通、奴らは群れを作ることには滅多にありません。単体で行動し、単体で人間を襲う。化け物の習性です」

「……優秀なリーダーが一匹いて、そいつらを組織している、ということ？」

「察しがいいですね」

威吹鬼は組んだ腕を解き、紅茶をもう一口飲んだ。美也は威吹鬼のクールな仕草に少しいらついたそぶりを見せた。

「なぜ群れなんか作って行動しているのかしら？」

「さあ……？　しかし、連中はこっちが思うほど馬鹿じゃない。もうハンターが来ていて、自分達の得物を守ろうとしていることに気付いているはずだ。となると……」

いつの間にか、室内が暗い。陽はかげりはじめている。

微妙な空気の澱みを、威吹鬼は感じ取った。

「おいでなすったようだ」

ガラスの割れる音がした。

「エントランスだ」

洛がかすれるような声で言った。

「待て、行くな！」

威吹鬼が叫ぶより速く、洛が部屋を飛び出した。同時に洛の絶叫が聞こえた。

「ちっ」

威吹鬼が疾風のように部屋から躍り出た。エントランスの東側にある大窓のガラスが粉々になっており、大きく開いた穴から体長一メートルほどの巨大なイナゴが二匹、今まさに侵入しようとしていた。

「こいつを！」

威吹鬼の足元から少し離れたところで洛が叫ぶ。

「こいつを先に何とかしてくれ！」

洛は先に侵入したイナゴの一匹に乗りかかられていた。洛は必死でイナゴの頭を自分から遠ざけようとしている。枝切り鋏ほどもある大きな牙が、がちつがちつと音を立てて洛の首の上で噛みあわされた。のど笛を食いちぎろうとしている。イナゴの口蓋からは絶えず薄黄色の粘液がだらだらと洛の顔に垂れ流されていた。

「こいつを！」

洛がもう一度叫んだ瞬間、イナゴは威吹鬼の強烈な前蹴りで吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられていた。

イナゴは全部で三匹いた。威吹鬼によつて壁に叩きつけられた一匹も体勢を立て直し、きちきちきち、と奇妙な声を出している。真っ黒な複眼が憎悪に燃えていた。

先頭の一匹がぶぶぶぶぶ、と羽根を振動させて飛び上がった。その瞬間、威吹鬼は腰のホルスターからコングを抜いた。

轟音。威吹鬼の狙いは正確だ。蟹自慢のアーマーピング弾はイナゴの眉間に命中した。イナゴの頭部は身体にずぶりとめり込んでひしゃげ、茶褐色の外骨格が割れて四方にはじけ飛んだ。一方の眼球が体液の尾をひきながら飛び、シャンデリアに引っかかった。

「いい弾丸だな」

威吹鬼は軽く口笛を吹いた。

頭を失ったイナゴは、いかにも跳躍力のありそうな太い脚をしばらくばたばたさせていたが、じきにおとなしくなった。

外見は虫そのものだが知能はあるらしく、同僚のあつけない死に他の二匹はたじろぎ、後ずさりした。

「どうした。来いよ」

まだ薄く煙を吐いているコングの銃身で、威吹鬼は肩をとんとんと叩いた。

「ひよつとしてお前ら、あれか？ お友達の葬式には行ったことねえのか？」

イナゴが二匹同時に大きく跳躍した。

威吹鬼に到達するまで約一秒。右と左から同時に襲いかかってくる。

威吹鬼はまず右のイナゴを向けてぶっぱなした。がん、という射撃の轟音に続いてどしゃ、とスイ力をコンクリート製の床に叩きつけたような音がした。イナゴは、耐火レンガ製の大きな暖炉に回転しながら激突した。放たれた弾丸は一匹目のように正面から命中したわけではなかったので、イナゴは顔の下半分、あごの部分が吹っ飛び、暖炉のそばでびくびくと痙攣していた。

もう一匹のイナゴが勢いよく、威吹鬼の左肩に飛びついた。一匹目と同じく、大きなあごについた鋏のような牙をがちがいわせている。節だらけのぼつとりとした腹部がぐねぐねといやらしく蠢いた。節と節の間には小さな寄生虫がびっしりと張り付いている。

「まったくお前らを見なくて済んでほつとしてるよ」

言うなり、威吹鬼はコングの銃身をイナゴの眉間に叩きつけた。重量七キ口だ。イナゴはぎゃつと叫び、威吹鬼の肩を離れて空中を飛んだ。間髪いれず、コングが火を噴いた。イナゴの頭は四散し、胴部はどしんと大きな音を立てて地面に墜落した。

威吹鬼はつかつかと暖炉のそばで痙攣しているイナゴに近づき、

頭をもう一発撃ち抜いた。イナゴは六本の足をピアニストの指のようにかたかたかた、と素早く動かし、そして活動を完全に停止した。屋敷のエントランスは散々なことになっていた。あちこちに緑と黄色と赤の極彩色の体液が飛び散り、悪臭を放っていた。

美也はぼかんと口を開けていた。

洛は脱いだジャケットで、顔についたイナゴのよだれをぐしぐしと拭いていた。

あおいは立ったまま腰を抜かしていた。

「ザコだったんで、すぐにケリがつけました」

威吹鬼はまだ銃身から煙を上げているコングを腰のホルスターに収めた。

「……高羅さん、この分だと一匹いくらでは難しいですね。何匹来るかわかったもんじゃない。料金のそこらのことは妖撃舎と直接話して下さい」

「……ええ……」

「どうしました？」

「……いえ……」

あまりの展開に、美也はなかなか適当な言葉を見つけることができなかった。

「何だか……お掃除が大変そうね」

「……ああ……」

威吹鬼は左右を見回すように首を動かし、鼻をひくつかせた。

「すいませんが、これから毎回こうなりますよ。掃除婦の方には毎日来てもらった方がいいかもしれない」

「そうね」

その時、うわあん、という泣き声が二階から聞こえた。麻貴の声だ。

「坊っちゃん」

あおいははつとし、目をぎゅっとつむって顔を二、三度強く振ると、階段を駆け上がった。

「安心して下さい。二階には奴らはいません。一階での騒ぎを聞いて怖くなっただけでしょう」

威吹鬼が落ち着いた口調で言った。息一つ乱れていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9206n/>

座頭銃【Zato-Gun】

2010年10月8日10時42分発行